

普通がいいと思うのですが！？

ニュイン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

女性にしか動かすことができない兵器、インフィニット・ストラトス。通称IS。

世界はそのISにより大きく変わつてゆく。

だが、世界よりも1人の少年 七星暁人（ナナホシ アキト）の周りは……。

Action 3	Action 2	Action 1	入学式	目次
賽の目の行方	若さゆえの過ち			
14	6	1		

Action 入学式

入学式というのは心踊るイベントの1つであり、高校生にもなるとこれまで感慨深いものである。

だが、勘違いしてはいけない。それは一般的な感想で普通の高校に限定される。

「——では自己紹介をしてもらいます。次は……織斑一夏くん！」

「はい！ 僕の名前は織斑一夏です。趣味は女装することで好きなタイプの人は……きやつ！」

自分の右斜め前に位置する女子生徒の制服に身を包んだ親友は、俺を見ると顔を紅潮させ勢いよく着席した。

この変態女装癖野郎が！ すぐにでも天罰が下らんだろうか。
「次は……篠ノ之箒さん！」

「はい。——私は篠ノ之箒だ、趣味というわけではないが小・中と剣道をやっていた。もちろんここでも剣道をやるつもりだ。好きなタイプだが……ふつ」

自分の前の席に位置する女生徒。自己紹介をしたその姿は大和撫子のようだが何故、俺をガン見しながらだつたのかはたとえ幼馴染であっても理解したくない。

色々ツッコミたくなる自己紹介もそろそろ佳境になつてきていた。

「では最後に七星暁人くん！」

「はい。俺は七星暁人——とりあえず普通が1番というのがモットーです。趣味は安寧な生活を探すこと。好きなタイプは世間一般的な女性です」

これから3年間、俺の安寧は成層圏を突き抜けて宇宙の彼方へと飛んでいつてしまつたんだと分かつてしまつた入学式だつた。

何故なら副担任である山田真耶先生に進行を任せ、担任である我が親友の姉の織斑千冬はせつせと携帯を可愛くデコレーションしていつからだ。



自己紹介も終わり、ちようど休み時間となつた瞬間2人の変態がこ

ちらに近づいてきた。

捕まり、心身共に疲弊している自分は関わりたくない思いで胸が一杯だった。

「ねえ暁人、僕の制服姿はどうかな？ 似合いすぎて欲情してきたかな？」

「おい暁人！ お前は剣道部に入るだろうから入部届けは2人分持つてきただぞ。……入るだろ？ 入ってくれ頼む、というか入れ！」

「待て待て、俺は聖徳太子じやないんだからいつぺんに喋るなよ。一夏はまず男子の制服を着てくれ、それに欲情はしねえから！ それで筈は剣道部だつたか……入らない以上」

自分がここまではつきりと言っているのにも変態2人はまたまたそんなこと言つて、という顔をしている。

責任は誰にあるのかはわかっているのだ、自分であると。

一夏の女装癖は顔が整つてゐたら女の子の格好でも似合うのではないか？ という言葉。

筈は一見するとわからないが、痛みを快感としてしまう超が付くほどのが虐趣味全開なのだが、これは剣道素人の俺が小手を防具に包まれている部分ではないところへ強打してしまったからだろう。

「クソッ、クソッ——クソが！」

「暁人！ 机を殴るなら私を殴つてくれ！」

優しく俺に木刀を握らせる筈。

まだこれならいいが腕を広げ、嬉々として待ち構えないでほしい。

「どうした暁人、遠慮せずともいい。渾身の一撃を私に……さあ、きてくれ！」

「ちよつと暁人！ 何でなの？ 髪も伸ばしたし、無駄な毛も処理したのに！」

「だから努力の方向性が間違つてんだよ！ このクソ野郎が！」

どこか遠くへ、変態がいない場所に行きたい。俺はただ普通に生活したいだけなのだ。

一夏が女性にしか反応しないISを動かしてやつと平穩に暮らせると思つたのに。

何が世界一斉男性操縦者検査だ！　というか何で俺はISに反応してIS学園に入らなきやいけねえんだ！

「ちよつと、よろしくて？」

「見ればわかんだろ、取り込み中だ！」

「まあ何ですか、そのお返事は！」

「お嬢様、取り乱してはいけません。貴族として——オルコット家の当主としての器で許容すべきです」

話しかけてきた金髪ドリルの女生徒は自分の返答が気にくわなかつたらしく、メイド服の女性に宥められてはいたが怒りは収まつていないらしい。

だが、この女生徒も女生徒だ。この状況で話しかけてくるだろうか？

この学園はISについて学ぶ学校、故に生徒も女性に限る。これはISが女性にしか反応しないからだろう。それでも空気を読んでほつといてほしかった。

「んんっ！　私はイギリス国家代表候補生にして貴族のセシリア・オルコット。オルコット家の当主ですわ！」

「流石お嬢様、先程の無礼を許すとは立派にご成長なられて。このチエルシー・ブランケット感激いたしました」

誇らしげに胸を張るセシリア・オルコットとハンカチで目元を拭うチエルシー・ブランケット。

正直、変態2人と比べると普通のカテゴリーに入るだろう。

「それに素晴らしい立ち姿ですお嬢様。これは貴族ポイントプラス10、このままいけば今夜はパンの耳にジャムを使用してもいいでしょう」

「そこ、それは本当ですのチエルシー！」

「はい。このままいけば、ですが」

「やつと、塩と水だけの生活から抜け出せるのですわね」

撤回。このお嬢様は普通ではなかつた。

それにメイドの方も普通ではないだろう。なにせオルコットを色々なアングルで写真を撮つているのだから。

手鏡で自分をチェックしている女装野郎、息を荒げて両手を広げるドM少女、夕食がパンの耳とジャムで号泣する金髪お嬢様、涎を滴ながら金髪お嬢様を撮り続けるメイド。

予鈴のチャイムが鳴り響き、自分の目の前で起こっていることが現実だと再認識させてくれていた。

「この時間の授業はISについての説明をする。では山田先生、私はやることがあるので頼む」

「わかりました。……では皆さん、ISというのはですねーー」
山田先生の説明は丁寧で、かつ理解しやすいように配慮されていた。

けど千冬さん、授業を山田先生に任せて自分はアップリケ制作に没頭するのはおかしい。

「さて、ここまで説明でわからない人はいませんか？ 特に織斑くん、七星くんは大丈夫ですか？」

「僕は大丈夫です、どうぞ先に進んでください」

「俺も大丈夫です。山田先生の説明がわかりやすかったので」

「なら良かつたです。では先に進みますね」

本当に良かつた。山田先生だけが俺の心のオアシスになりつつある。

山田先生の笑顔があれば俺は後10年は戦える。

「そういうえば、再来週に行われるクラス対抗戦の代表を決めなくてはいけなかつたな。……七星、お前がやれ」

「そういうえば、でしたね。七星くん、1組を代表するといつても仕事は学級委員のようなものですし、他のクラスとの実力も入学して間もないですから大丈夫ですよ」

千冬さん、アップリケ制作が上手くいかなかつたからって俺に八つ当たりしないでください。

山田先生も少しは自分を庇護してくれると思つたが、千冬さんの威圧感が半端無さすぎてチワワみたいに震えていて期待できそうにない。

「わ、わかりまーー」

「納得いきませんわ、そんなふざけた選出では！」

渋々承諾しようとした時、オルコットが異を唱えてくる。

いいぞオルコット！ 今日のお前は凄く輝いてる、もつとあの乙女チックな理不尽大魔王に言つてやれ！

「ほう、この私に意見するか小娘。……最期に言い残すことはあるか？」

「ひい！ せ、せめてケーキを……ケーキをお腹一杯食べてからにしてくださいですわ！」

「お嬢様、今まで貴族ポイントマイナス20。今日の夕食は塩と水です」

「そ、そんな……。あんまり……ですわ」

あんまりだよ、本当にあんまりすぎるよオルコット。

今まで教室にいなかつたのに何処から出てきたんだよこのメイド。

「ですが織斑先生、オルコットさんの言い分もわかりますしここは多数決でーー」

「ならばこうしよう。七星、オルコット両名は1週間後に模擬戦をして勝者がクラス代表とする。これでいいな」

山田先生の提案を遮り、千冬さんが強引に終わらせる。

流石だぜ千冬さん、理不尽さでいつたらあなたの右に出る人はいないな。

「勝ちますわよ、オルコット家の名にかけて！」

「流石です、お嬢様。ですが、涙目により貴族ポイントの変動はあります
せん」

俺は逃げられるのだろうか。

「羨ましいな、痛みを味わえる戦闘がやれるとは」

「うーん。枝毛が気になるなあ」

理不尽な現実から抜け出して普通の生活を送れる日は来るのだろうか。

Action 2 若さゆえの過ち

人というのは第一印象で大体決まる。

内面的な部分を見るという人もいるかもしれない。だが、そんなもの初対面でわかれというほうが無理な話である。

付き合う中でその人の性格等を考慮した距離感という目には見えない不確かなものに頼らねばならない。

するとどうだろう？

人間関係の取捨選択を間違うだけで面白くもなく、ただただ苦痛な喜劇の出来上がりである。

「ああー……」

昼休みの教室。

普通なら友人と食事をしながら会話に花を咲かせ、午後の授業を迎えるための小休止を使う時間。

「うあー……うぐつ」

憂鬱。

ただその一つの感情だけが重い枷となり、身体の自由と心の余裕をガリガリと食い潰していく。

「あーきーとつ！」

「うびゅつ」

机に突っ伏して現実逃避をしていたというのに自分を呼ぶ声した後、何かが背中にのし掛かってきた。

「暁人。項垂れてないで一緒に^{昼ご}飯食べようよ！」

「そうだぞ暁人。午後からの授業が学園内の施設説明とはいもたないぞ？」

自分が好きでこうしていると思つていてる変態二人。

一夏は背中に抱きついたまま、箸はどうと弁当箱を手にしている。

普通にしていればまともに見えるのだから厄介極まりないことこの上ない。

「暁人？ ……あー！ やっぱり僕の隠しきれない魅力に声も出ない

んでしょ？」

「あ、暁人……。無視は酷いぞ。いや、これは俗にいう放置プレイとい
うものか！　ふふつ、これは……なかなかクルな……」

俺が黙っているのを自分の魅力に言葉を失っていると思つて
いる女装変態野郎と、一種のプレイと勘違いして興奮で身体をクネクネと
よじつているドMサムライガール。

何故こうも自分に都合のよい方向に解釈ができるのか不思議で理
解できない。

「そ、そんな暁人。駄目だよ、僕達は親友で男同士なんだよ？　え！
それでもいいって……もうしようがないなあ」

「放置プレイの次は亀甲縛りからの目隠し拘束プレイだと！　胸が熱
いな……」

「……俺、学食で済ますから」

妄想の世界へと旅立つた変態達に別れを告げて教室から出るとい
う賢明な判断をする。



普通。安寧。

どれだけ求めても手に入れることができなかつた理想。
簡単だつたではないか。

ひどく遠回りしたがそれだけ達成感はあるというのだ。別にあ
の二人が嫌いというわけではない。幼馴染であり、大切な友人である
のは間違いない。

原因は自分にあるのは認めよう。負い目を感じ軌道修正はした、何
度も何度もだ。初期よりも酷くなるのはどう考えてもおかしい。

「クソがっ！」

自分の不甲斐なさ、ぶつけようのない苛立ちを吐き出すように握り
拳をテーブルに叩きつける。

折角学食のおばちゃんが作ってくれた旨い食事に、水を差すわけに
はいかないと頭をふり気持ちを落ち着かせる。

「……それでオルコット。何でお前は俺の目の前にいるんだよ」

「お気になさらなくて結構ですの。さあ、わたくしのことは居ない者として食事を続けてください」

無視するのは到底無理というものだ。

オルコットはテーブルを挟んで自分の対面に座っているのにも関わらず塩と水を持ち、俺のミックスフライ定食を涎を滝のように垂れ流しながらガン見しているからだ。

「なあ、オルコット。一口食べるか？」

「よよよよ、よろしいんですの!?」

別に哀れみで譲渡するわけではない。ただ、あまりにも血走った目で見ていて怖かつたからだ。

カツを一切れオルコットの目の前に持つていくと淑女とは思えない程の大きな口を開けて待ち構える。

涙を流しながらモキュモキュと頬を膨らませて咀嚼する様は可愛いとは思う。だが、それでいいのか英國貴族。

「お嬢様、私はとても悲しい気持ちで一杯です」

「んぐ！ んぐぐう！」

「弁明は後程伺います。お仕置きが終わつたら、ですが」

「んぐぐ！ んぐ、んぐ、んぐぐー！」

金髪のハムスターは突如現れたメイドのブランケットに首根っこを捕まれドナドナされていった。

「ねえねえ～ちょっとといいかな～？」

「はい？」

呼ぶ声に振り返ると袖がだいぶ余つた制服を着た女生徒が一人ケーキセツトを持って立つていた。

「こ、いいかな～？」

「あ、ああどうぞ……」

自分の隣に座ると持つてきたケーキセツトを食べ始める。

残すはショートケーキの苺だけとなつたころ、隣の女生徒が不意にこちらに身体ごと向く。

「そういえば私達つても同じクラスだよね～」

「そ、そうだつたけか？」

「むく。酷いよ～」

ふくー、と頬を膨らませて怒つてますという意思表示をするがどうにも名前がわからない。

自己紹介の時は一夏と筈に加え、職業が不明だつた千冬さんが担任だつたことがショックでまともに聞いていなかつた自分が悪いのだから仕方ない。

「布仏本音だよ～。ちゃんと覚えてよ～これからよろしくするんだから～」

「あはは……悪い……」

なかなか名前を言つてこない自分に痺れを切らした布仏が自己紹介してくれたが、本当に困つた。

そっぽを向いたままの彼女はまだ怒つてているだろう。

「あー……布仏つてショートケーキの苺は最後に食べる派なのか？」

「んく。……最後に食べるつていうより、そのまま見るだけかな～」

「え！ そのまま……見る？ 食べないのか」

「うん～そのまま～。大事に大事に見るかな～。友達は変だよって言うんだけどね～」

上手く彼女の意識をそらすことができた。なんとも狡いがあのままというのも致し方ない。

けれど、布仏本音という少女は自分の周りで見れば普通の女の子だ。苺を最後に食べるのではなく見るだけで満足する点を除けば、だが。

山田先生を含め、久しぶりのまともな人物との邂逅で油断したのだろう。

ましてや同年代の異性ということもあつて間違つてしまつた——己の選択で起こることを——それは蟻地獄に落ちていくように。

「いや、変じやないだろ。可愛いと俺は思うけどなあ」

「本当かな～？」

「本当だつて。女の子らしくていいし、布仏みたいな可愛い子が『彼

女』だつたら俺は嬉しいけどな！ ……なんてな！」

「…………」

昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴る。

周りを見るとぞろぞろと他の生徒は席を離れて教室へと向かっている。

「布仏。チャイム鳴つたし俺達もーー」

「本音」

「え？ 布仏どうした……つ！」

最後まで言葉を言い切れなかつた。

彼女の瞳を見て身体が金縛りにあつたような感覚に陥る。

「あ、や、えつと……」

「『本音』つて、名前で呼んでアキくん？」

「痛つ！」

痛みを感じた右腕を見ると、爪が食い込むのではという程に布仏の両手がつしりと捕まっていた。

「何をしている七星。もし遅刻してみろ楽しい個人指導が待つているぞ？」

「す、すんません織斑先生！ 先に行つてるからな布仏！」

「…………」

「ん？ 布仏、貴様も遅れないよう急げよ」

「……はい」

千冬さんの個人指導が嫌で、無理やり腕の拘束を抜けて俺は教室に向かつた。

後ろを振り向かずに一直線に。



放課後。

長く、とてもなく濃い一日。後は暖かい布団の中で現実逃避をしあくてたまらない。

「暁人！ 放課後だ、部活だ、剣道場に行くぞ！」

「ちよつと篝！ 暁人は僕と一緒に放課後デートの約束してるんだから邪魔しないでよ！」

一夏と篝は俺の目の前で取つ組み合いの喧嘩を始める。

何で現実はこうも残酷なのか。

不幸中の幸いなのは二人が午後の授業開始までトリップしていて、千冬さんの鉄拳によつて昼休みの記憶が飛んだことで急に居なくなつたのを追及されずに済んだ。そのせいか一人の記憶は自分に都合のいいものへと書き換えられていた。

「今日は疲れたから一人とも今度な、今度」

「うー……わかつた」

「ふむ……仕方ないな。では暁人、明日の朝に剣道場で稽古だからな」「了解」

二人の喧嘩が終わつたので教室から出た瞬間、千冬さんと山田先生に鉢合わせする。

「織斑くん、七星くん！　まだ帰つてなくてよかつたです」

「どうかしたんですか山田先生？」

「それはですねーー」

「諸事情により貴様ら二人は自宅通学ではなく、学園内の寮に入つてもらう。……生活用品などは既に部屋に届けておいたから安心しろ」千冬さん、山田先生の言葉を遮つてまで言わなくてもいいじやないつか。

ほら、山田先生を見てください。涙目でプルプルしながらスカートを掴んでるから！

「千冬姉——じやなくて織斑先生！」

「何だ織斑？」

「僕は暁人と同じ部屋ですか？」

「違う。……それと篠ノ之、お前でもないぞ。というより織斑と篠ノ之が同室だからな」

一夏と篠がああだのこうだのと、いまだに抗議しているがラツキーだ。

俺は小さく誰にも見えないようにガツツポーズをする。
想像しよう。

どちらかでも一緒の部屋になつていたら十中八九いや、確実に発狂していただろう。

「あの、七星くん？」

「はい！　山田先生何ですか？」

「これが七星くんの部屋の鍵ですので無くさないでくださいね。それと、くれぐれも同室の人には迷惑をかけないこと以上です。それじゃあまた明日」

「はい！　……はい？」

それだけを言うと山田先生は去つていき、一夏と篝は千冬さんに引きずられながら遠くへと消えていった。



渡された鍵に記された番号の部屋に来てみたが、正直不安しかな
い。

一人部屋だと思っていたのにまさかの同室の人がいる。
ここは I.S 学園。俺と一夏を除けば他は全員女子というハーレム
のような状況。

「ヤバい……冗談抜きでヤバい」

思春期男子の性欲を舐めないでほしい。

下手をすればドアの鍵穴でも欲情できるどうしようもないエロの
魔神だというのに。

「マジでどうすつかな。……とりあえず入るか」

部屋に足を踏み入れると、部屋は電気が点けられておらずまだ同室
の人は帰つていないと予想する。

手探りで進むと左手にスイッチらしき感触があつたので押すと部
屋に電気が点いてよく見える。やはりというか自分の他には誰もい
なかつた。

「待つてたよーア・キ・く・ん」
「つ！」

誰もいなかつた。

確認もしたーー自分以外の人間はいない筈だつた。

声が聞こえた。

自分の背後から最近聞いたことがあるーーやけに間延びした少女
の声を。

「んぐぐ！」

「暴れてもだめ。でもビックリしたよ。同室の人アキなんだなって。」

反応なんてできなかつた。

気づけばベットの上に押し倒されていた。さらに口の奥までハンカチを捩じ込まれ、両手を頭の上で拘束されている。

全力で抵抗しているのに彼女——布仏本音は左手一本で押さえつけている。

「私ね、嬉しかったんだよ。周りからは変わつてるとか言われてるのにアキくんは私を肯定してくれた」

「んぐ、んぐぐ！　んぐぐぐ！」

「それに、アキくんは言つてくれたでしょ？」

「ん、んぐ！」

「私を、『彼女』にしたいって。」

見てしまつた。彼女の瞳を。

どこまでも暗く、淀みきつた眼を。

それは俺の存在しか映していない。

「ふふふ。ア、キ、く、ん」

彼女は俺の上に乗りながら右の人差し指で円を描くように胸板をなぞつては笑みを浮かべるだけ。

男というのはどうしようもない生き物だ。

女の子特有の甘い香り、柔らかさによつて微弱な電流が終始身体を駆け巡つてゐる。

ふと、冷静な部分が答えを出してしまつた。

彼女にとつて今の俺はショートケーキの苺なのだと。

Act i on 3 賽の目の行方

人生山あり谷あり。

この諺は今の自分に深く、それも抉るように刺さるものがある。

人生というのは幸せも不幸もあるのは当たり前。人の数だけその種類も様々であり、捉え方でさえ度合いが違つてくるもの。例えばだ。

幸福・不幸という振り子の振り幅が小さいと自分では思うが他人から見た時、それは大きいではないかと言われることもあるということ。

だが少し考えてみればわかることかもしれない。

他人は所詮他人で、それを感じる当事者にしか計れない。

いくら視野を広げても考え方を変えて、ましてや自分の立ち位置を変えても無駄である。

そこには山も谷もありはせず、観客も居ない。舞台袖からはナニかが手招く手が見切れ、気づくと視界は暗転して意識はフェードアウトする。

進んだ先が奈落ならどれほど良かつただろうか？ 実際は回転する独楽のようなものが人生であり、回り続けた先には何も無い。あるのはただ消費し、失い続けた操り人形がポツリと落ちているだけかもしれない。

朝、全身に感じる重さによる息苦しさで目が覚める。
目線を下げてみると、そこには気持ちよさそうに寝息をする布仏が俺の腹の上にいた。

「あゝ。……なるほど、ね」

息苦しさの正体は人一人の重さによるもの。理由も昨日の顛末も把握した。それでも、これが未だに自分の夢であり日々のストレスによる妄想が作り出した幻覚であつてほしいのである。

時間はもうすぐ七時を記録しようとする。同居人でもある布仏を

起こし、身支度を整えなくてはならない。

意を決して幸福な夢を見ているであろう白雪姫を起こすとするが、王子様の口づけで起こすのがセオリーダラう。しかし自分の配役は王子様ではなく、毒林檎がふさわしい。

「おい布仏！ そろそろ起きてくれ」

「うみゅ～……」

俺が声をかけると、目元を擦りながら呻き声を発する姿は素直に可愛いと思う。

その手に握りしめられた注射器は見なかつたことにしたい。

「やつと起きたか布仏ーー」

「本音……」

何故だろうか？

寝起きの彼女の眼はまだ据わつたままのは。

思考が追いつかない。

瞬きをしていないのに注射器を俺の首筋にあてがう動きが全く見えなかつたのは。

「あ、あの……」

「本音……。昨日～名前で呼んでつて～言わなかつたつけ～？」

名前を言えば事は収まるだろうが、言つたが最後のような気がしてならない。

「呼んでもくれないんだ～。そつか～……そなんだ～」

彼女の人差し指に力が加わり、撃鉄を起こそうとする。

一刻の猶予などなく、判決が下されようとされる。

「ほ、本音！ そ、そろそろ時間だから準備しないと！」

「……時間？ あ～本当だ～！」

「な！ な！ もう、いい時間なんだよ。だから、な！」

「そうだね～。じゃあ～準備しよつか～」

判決に待つたが通り、一時的に助かつた。これが俗に言う首の皮一枚というやつだろうか。

俺という毒林檎を捨ててほしいが、彼女はそれ以前の問題だと気づくべきだつたのかもしれない。

例えそれが毒林檎だとしても彼女は大事にするだろう。それは不安定な神様のように意味もなく自分の領域に置きたいだけなのだから。



何とも朝から寿命が縮んだものだ。およそ十年は減つただろう。いや、十年の時間を僅か数分の間に進んだと解釈すると、気分も超能力者になるかもしねれない。

「七星ここにいたか」

自分を呼ぶ声に振り返ると、そこには仁王立ちする理不尽大魔王こと織斑先生。

逃げるコマンド連打待ったなしの状況が作られた瞬間だった。

「おい、私の顔を見るなり嫌そうにするな。一応これでも非の打ち所がない美女だぞ？」

「痛い痛い痛い、玉が割れる！ 玉があああ！」

非の打ち所がないというのはありえない。

他人の、それも男の大事な部分を握り潰さん勢いで掴む筈がない。恥じらうどころか嬉々とした顔でやるなんて以ての外だろう。

「仕方ないな……。あなたはとても美しく、優しく、完璧な程の絶世の美女にも拘わらず何故男は言い寄つてこないのか不思議でなりません』……さあ、復唱しろ。すれば解放してやろう」

「あなたはとても美しく……は、優く……か、か完璧な程の絶世の美女にも拘わらず……何故男が……言い寄つてこないのか不思議でなりません！」

「そうか、そうか！ そこまで言われたら仕方ないな解放してやるが、次は氣をつけろよ？」

「は、はい……氣をつけます……」

脂汗が止まらない。それも尋常ではない量が噴き出している。

軽い走馬灯を見たが、まともな人生を歩んできてはいないので反吐が出る情景を見せられただけだった。

「それはそうと、貴様に専用機をと話があつてな。貴重な男性操縦者だ、一応織斑にもこの話をするとつもりだがな」

「そう……なんですか……」

「専用機だぞ、もつと喜ぶかと思つたが違うのか？」

「い、いえ。嬉しいといえば嬉しいです。でも、変に目立つのはちょっと……」

正直な話、専用機というのは嬉しい。ISの核となるコアが有限であり、増やすというのが無理な状況で個人専用に使うのはそれだけの価値がそいつにあるからだ。

だが、自分には誇れるものはない。ましてや一般家庭で育つたために強力なバツクがいないのも問題だ。

「そうか……なら七星、逆に考えればいい。これはチャンスだとな」「チャンス？ 何ですか」

「簡単なことだ。貴様はここにいる三年間で結果を出さなくてはならない。出せなかつた場合生きた実験台としての未来が待つているからだ」

「そんな馬鹿な話が——」

「あるのさ。それも神も仏もいらないこの肥溜めみたいな世界は、な。だが安心しろ七星、もしそうなる場合この私が貴様を貰つてやろうじゃないか」

最悪だ。それも永遠に続く悪夢だ。

何がなんでも結果を出さなくてはいけない理由ができてしまった。それも死に物狂いで挑まなければならぬほどに。

確かに織斑千冬という女性は容姿端麗、高収入。さらには世界最強の称号『ブリュンヒルデ』を得ている。

しかしそれは奈落へと続く落とし穴だ。なぜなら、それを余りあるマイナス要素が揃っている駄目人間だからである。

「ど、とりあえず頑張つてみます……」

「遠慮なんかせず素直に私と結婚しろ——というかなつてください願意します！」

「用事を思い出したのでここで失礼します！」

「待て七星！　いや、待つてくれマイダーリン！」

音を置き去りにするほどの全力疾走する自分の後方で、切なく必死な声が聞こえるが立ち止まつた瞬間に何もかもが終わる気がした。



格納庫。

ここは訓練機である『打鉄』や『ラファール・リヴァイブ』が置かれているだけでなく、各ISを整備するための施設である。

何故に自分がここへ来たかというと訳がある。それは——

「やあ、よく来てくれたね。待つてたよ、あつくん！」

「久しぶりすね、束さん……」

両手を腰にあて、仁王立ちする目の前にいる女性は篠ノ之束。IS開発者にして自称天才科学者のマッドサイエンティストである。

「それで？　わざわざ山田先生を脅してまで自分をここに呼んだ理由を聞きたいんですけど」

「そんなの簡単な話だよ。あつくんはちーちゃんと結婚したいかい？」

「死んでも嫌です！」

「あつはつは！　だよね～！」

ブルブル震え、さらには涙を限界ギリギリまで溜めた山田先生が自分に頼んできたのだ。頼むから格納庫に至急行つてくれ、と。

自分も山田先生の頼みならと何も疑わずに来てしまつたことに何か後悔しているが、もう遅いだろう。なぜなら自分は簗巻きにされた状態なのだから。

「さて、と。面倒だからさつそく本題に移ろうか。あつくんはちーちゃんと結婚したくない、束さんはあつくんをちーちゃんなんかにやるつもりもない。ここまでいいかい？」

「はい……。大丈夫じゃないけど大丈夫です」

「おーけーおーけー。ならあつくんには、この大天才科学者の束さんが作つたISに乗つて世界最強になり束さんのお嬢さんになつてもらいます。以上！」

「ちよつと待てアンタ！ 前半はいいが後半のお嬢さんっていうのはおかしいだろうが！」

「えへ。全然おかしくないよ？」

駄目だ、この人本当に色んな意味で駄目だ。

馬鹿と天才は紙一重とはよく言つたもので、この人のためにある言葉だろう。

だが、今はいい。一度機嫌を損ねると危険な人で、昔に起こつた事件——白騎士事件でガンを飛ばされたという理由で、日本に攻撃可能な各国のミサイルを一斉にハッキングして日本に向けて発射した程なのだから。

「……わかりました、わかりましたよ！ やればいいんでしょ！」

「あつくんならそう言つてくれると思つてたよ！ じゃあ早速乗つてくれるかな、かな？」

彼女は後ろにあるISを俺に見せるように横にずれる。
ゴツゴツとした外見をしていて、さらに紫色というのがまたなんとなく無骨感を際立せている。

「機体名は“ワンドラー・ラビット”さらには戦闘用AIを搭載しているというオマケ付き！ 武装はなんとたつたの六個。だけど初心者にも安心安全な規格外な物ばかりなので問題ナツシング！」

「え、待つて。今、なにかーー」

「じゃあ早速試してみよつか！」

「人の話を聞けよおおおお！」

無理やり機体に乗せられ試運転することになり地獄は始まる。

六基のチエーンソーが付いた剣のようなモノが駆動する。

「ぎやああああああ腕がああああああ！」

「あつちやー」

右肩に折り畳まれた砲身らしきモノから弾が発射される。

「ほああああああ！」

「これぞロマン砲！」

四角い棒が扇状両肩から左右に展開した。

「うわああああアリーナが焼け野原になつてるうううううう！」

「最つ高だね！」

右肩にあるユニットが展開した後、ミサイルが発射した。

「ふおおおおおお！」

「たーまやー！」

超デカイ剣。いや、建築資材。

「待つて待つて、ちょ、俺まで引っ張られてるうううううう！」

「ちようど いらない柱があつたから……つい、やつちやたんだぜ！」

フジツボが太くて長い筒状になつた。

「アリーナのバリア切り裂いたんですけどおおおおお！」

「歓迎しよう、盛大にね！」

俺が地獄の片鱗を味わつていた頃。

「あ、暁人……。これ以上放置されたら私は……私は！」

ドMサムライガールが一人、剣道場で幸せそうな顔をしながら悶えていた。